

もしも剣と魔法の世界に日本の神社が出現したら4

チェレスティアノ

アルティス聖教会の枢機卿だが、  
正体は《悪魔》。

カガリ

リカンツ  
獣人族の勝気な青年。  
回転式拳銃を使う。

ヴィクトリア

エルナト王国の  
新たな王となる。  
お転婆な性格は  
変わっていない。

メリッサ

改革派の正司祭。  
爽悟に協力的だが、  
何か裏の意図がある様子。

コンスタンツェ3世

アルティス聖教会の教皇。  
自らの意思を持たない。

藤重雷矢

爽悟の弟。  
人見知りがちで、  
感受性が強い。

藤重爽悟

本編の主人公。  
将来は神主になるべく修行中。  
腕が立ち、正義感が強い上に、  
何事にも動じない性格。

目次

序章 北方の火薬庫にて 7

第一章 迷える森 21

間章一 暗躍 81

第二章 弓と銃と 86

間章二 魔術師と枢機卿すうききょう 139

第三章 見習い神主の竜退治

間章三 ある悪魔と少年 222

第四章 竜の酒宴 234

終章 火種 290

## 序章 北方の火薬庫にて

凍った大地に、乾いた風が吹き抜ける。

不毛の永久凍土にも、小さくもたくましい緑が根差している。それらはとても食えた味ではないが、もさもさと無心に口を動かすヤクにとってはそうでもないらしい。

獣避けの篝火に護られたテントも、ヤクの毛と皮、そして骨で作られたものだ。ヤクのもたらす全てを糧に、ツンドラの民は遊牧を続ける。彼らには他に生きる道がなかったが、さりとてそれを不幸と考えているわけでもない。

遠い古代文明隆盛の折、奴隸と獣を掛け合わせて創られた種である彼らは、獣人族と呼ばれる。その外見は多様であるが——ここは狼の氏族の拠点だった。

あくびを噛み殺しながら見張りに立つ三十代ほどの男の頭には、特徴的な狼の耳が生えている。それでいて人間の耳も頭の横から生えているのだから、なんとも不思議な姿だった。彼らの鋭い嗅覚を示すように、鼻は完全にイヌ科のもので、尖った犬歯は彼らの好戦的な性格を表している。これほどの冷たい風の中で随分薄着なのは、服の下が豊かな獣毛で覆われているからだろう——

氷の大地に乾いた風の音ばかりが響く。獣人族の男は自然に、うつらうつらと船を漕ぎはじめ——

「おい」

その頭を小突いたのは、男より随分若い獣人族だった。年の頃は二十歳より少し前だろうか。

「俺の目が黒い内は居眠りなんかさせねえからな」

年長者に対して横柄な口の利きようだが、男は気にした様子もなくへらりと笑う。

「はは。坊の目は、紫じゃあないですか」

「お前は、カンヨウクってやつを知らねえのか」

「知ってますとも」

牙を剥いてジロリと睨みつけてくる青年——カガリに、臆したふうもなく男はまたへらりと笑った。青年は舌打ちすると、一際大きなテントに視線を向ける。

「んで、親父殿のところに『毛なし』の偉いさんが来てるってのはどういうことだよ」

「さあ？」

「親父殿もなんでそんなやつを呑気に招き入れてやがるんだ」

「さあ？」

「お前もなんでそう適当なんだ！」

「さあ？」

またへらり、と笑われたカガリは顔を真っ赤にして地面を踏んだ。ふざけんな、ふざけんな、バカにしやがってくそじじい、と知能指数の低い言葉を喚き散らすのを見て、男はついに我慢できなかったのか、ゲラゲラと腹を抱えて笑う。

「長が大丈夫ってんなら、大丈夫だと俺あ思いますかね。気になるなら行きやあいじやねえんですか。それともなんですか、坊はいまだに長の雷が怖いんでえあ！」

にやにやとカガリの顔を覗き込んだ男の鼻面に、カガリの固い頭蓋骨が衝突する。男はのけ反って、そのまま尻もちをついた。間抜けにひっくり返った男に一瞥をくれて、カガリはけつと吐き捨てると、すたすたとテントへ向かって歩き出した。

「入るぞ、親父殿！」

そう言うより早く、カガリはテントの入口をくぐっていた。ドーム状のテントは見た目よりずっと広いが、防寒のために窓はなく、昼間でも薄暗い。夜目の利く彼らには苦にならないが、それでも暗がりからジロリとこちらを睨みつける壮年の獣人族には、相応の迫力があつた。カガリと同じ銀色の髪に、紫の瞳。カガリと比べるとその眼差しはずっと鋭い。実子であるカガリが、思わず尻尾を股に挟んでしまうほどだ。

このくらいの威厳がなければ気性の荒い獣人族をまとめることなど叶わないだろう。ちなみに当の本人は睨みつけているつもりはなく、ただ元々目つきが悪いだけのようだ。我が子の振る舞いが嘆かわしいと言いたげにため息をつく。

「客人の前ぞ、カガリ。お前は どうして落ち着きというものがないのだ」

「親父殿が落ち着き過ぎなんだ！」

カガリは牙を剥き、腰に下げていた武器を取り出す。カチャリと小さな絡繰の回る鉄の音。客人に向けられたそれは、一見するとただの筒だが――

「よりもよって、コイツは教会の司祭じゃねえか！ コイツらに何をされたのか、忘れたわけじゃないだろ！」

「もちろんだ」

我が子から向けられた非難の言葉に、ホオリは静かに答える。

「我らを忌むべき存在として喧伝し、斯様な極寒の地に押し込めた。このボラリアに住まう獣人族にとつては、お前さま方こそ忌むべき存在よ」

ホオリの言葉に、目の前の聖職者を非難する様子はなかった。彼はただ、事実を述べているだけ——とはいえ、言われている方は気分の良いものではあるまい。教会による獣人族の——というより、亜人種の迫害は、その成立から長きにわたって続いている。多くの亜人種は人の手の及ばぬ場所で見え住むように暮らすしかない。獣人族がこのような過酷な地を選んだのも、人間の適応できないこの場所ならば、人間の軍隊が攻め入ってくるのではないからだ。

ただエルナト王国成立の折、一度だけ先走った貴族の一部が軍勢を引き連れてきたことはあった。冬の訪れによって撤退していったが、当時から南方を生活の場としていたホオリたちの氏族は多くの犠牲者を出した。この一件により危機感を覚えた獣人族がまとってできた共和制の国家、それが彼らボラリア獣人連盟なのだ。その貴族を扇動した教会の聖職者に、カガリが必要以上の敵意を向けるのも当然のことである。

「——ご子息ですか、ホオリ卿」

ホオリと向き合っていた男が、柔和な笑みを浮かべる。敵意と武器を向けられているとは思えな

い、悠然とした所作だった。うむ、と絞り出すようにホオリは肯定する。

「不肖の息子というやつよ。どうにも落ち着きがなくてな。我も手を焼いておる」

そうですか、と返すと、聖職者の地位を示すローブをまとった男は少しも動じることなく、カガリの方へ向き直った。

「お目にかかれて光栄です、若き狼殿。私はチェレスティアノ——及ばずながらコンスタンツエ聖下のもと、枢機卿の任を賜っております」

優雅に一礼され、カガリは奥歯がギツと鳴る。

「おっさん、自分に向けられているのが何かわかってんのか？」

「存じあげていますとも」

チェレスティアノは笑みを崩さずそう言った。だが、カガリの手元を観察する眼差しは、ひどく冷え切っている。

「銃でしょう。まじない程度にしか魔法を扱えないあなた方獣人族が、我々アルティス聖教会に對抗し得るたつた一つの強みと言えましょうな。ただ——ふむ」

カガリの肩がびくり、と跳ねる。チェレスティアノの指が、カガリの背後から銃に触れていた。何が起きたのか若い獣人族が理解するより先に、ひよい、とチェレスティアノが銃を取り上げる。カガリは動転した。

——何が起った。この男はいつ、どうやって、自分の背後に移動した？

カガリの動揺など素知らぬ顔で、チェレスティアノは元いた位置へとゆっくり歩きながら、手に

した回転式拳銃をしげしげと観察する。

「あちら側では型落ちもいいところ。旧時代の遺物。まあ、骨董品でしような」

辛口の評価を下すと、呆然と固まるカガリに拳銃をほいと投げて返した。慌ててそれを受け取ったカガリは、キッとチェレスティアノを睨みつける。

「おっさん……あんた何者だ」

「これでも枢機卿の中では若過ぎると言われているのですがね」

チェレスティアノは肩を竦めて笑う。カガリが毛を逆立てる。目の前の相手を脅威と認定した獣は、いつ弾け飛んでもおかしくない。

「——カガリ」

それを収めたのは、父にして長たるホオリの静かな声だった。

「やめよ。何故、我がこの男を迎え入れたかわからぬか」

「親父殿——」

反駁しようとする息子に、ホオリはゆるりとかぶりを振る。

「お前は荒ぶる風を止められると思うか。いかに牙を磨こうとも、齒の立たぬ相手はおろうよ」

その言葉に、カガリはぐっと黙り込む。先ほどチェレスティアノはカガリの後ろに周り込んだ。移動したことを、認識すらさせずに。明らかに、ヒトの技ではない。どうあっても力の及ばぬ相手であることは、未熟なカガリにもはつきりとわかった。

「——それでチェレスティアノ卿。お前さまは我らに何を求めているのかな」

ホオリはカガリが銃をおろしたのを確かめると、目を眇め、静かに切り出した。

「このポラリアが、お前さまがた『毛なし』になんら意味のある場所とは思えぬ」

永久凍土が広がるばかりでこれと言った資源のない場所であることも事実だ。獣人族が幅を利かせていることが目障りであっても、わざわざ干渉する価値のある場所とも思えなかった。

「なんぞ求めるところがあるわけではありませんがね。ただ、枢機卿として教会を束ねる身としては、あなた方の動向を確かめたいのです」

チェレスティアノはホオリとカガリを順番に見て、続ける。

「エルナト王国に政変が起きたとあらば、あなた方にも無関係ではないでしょう？」

エルナトの名に、ホオリの、獣の方の耳がピクリと動く。

元よりエルナト王国は、獣人族にとって因縁のある相手だ。

国王エドワードの統治下においては暗黙の了解として相互不干渉を徹底しており、これと言った争いもなかったが、国境を接した大国が脅威であることに変わりはない。

この男の言葉が真実なのか、そもそも枢機卿とかいう肩書が嘘かまことかもしれないが、それでも外からもたらされる情報に、耳を傾ける価値はあるだろう。

「——聞こう。エルナトに何が起きたのか」

ホオリは腕を組み、チェレスティアノを促した。

「国王エドワード陛下が崩御なさいました。宰相イザドルの謀反によるものです。幸いもう鎮圧されましたが、当面は不安定な政情が続くでしょうな」

「……跡取りは。かの国はこのところ、それで揉めておったはずだが」  
 「国王エドワードは王女ヴィクトリアを指名したようですよ。アダレード將軍とゼアディール公爵が証人とのこと」

チェレスティアノの言葉を、カガリがハッと鼻で笑い飛ばす。

「アホらしい！ 頭の固い『毛なし』が女の王なんて認めるわけねエだろう！」

「まあ、少なくとも他の枢機卿は認めないでしょうね。貴族たちも心からの忠誠を誓う者は、そう多くないでしょう」

嘆かわしいことです。そう言っただけでチェレスティアノは肩を竦める。

「多くの者は認めぬだろう。我ら獣人族にも女の長は多いとは言えぬでな。して——」

ホオリは組んでいた腕を解き、チェレスティアノに問いかける。

「お前さま自身はどう考える。ヴィクトリアとかいう女子が、王の座に相応しいと思うのか」

「ヴィクトリア殿下——いえ、今は陛下ですか。私としては彼女こそが理想の王ですよ」

チェレスティアノはなんの迷いもなくそう答えた。

「枢機卿と言っても、我らポラリアと同じ合議で政を進めておるのであろう。お前さまがどうであらうと、他の枢機卿が認めねばどうにもなるまい」

「おっしゃる通りですな」

ホオリの言葉を、チェレスティアノはあつさり肯定する。

「エルナト王国と教会の対立は避けられますまい。最悪の場合、エルナト王国を中心に、アルレシ

ヤの大地は二つに割れる」

そう言っただけで、チェレスティアノはふふ、と笑う。

「戦になるつてのに、随分楽しそうな聖職者さまだなア、おい」

剣呑な声色を変えずに、カガリが言う。

「まるで大戦になってくれと言わんばかりだぜ」

「今の教会のありようには、私も少々辟易しておりますものでね」

カガリの皮肉を、チェレスティアノはあつさり受け流す。

「——それで」

二人の会話を聞いていたのか聞いていなかったのか、ホオリが切り出す。

「それを我らに伝えて、お前さまは一体どうするつもりなのだ」

「あなた方の好きにすればよいですよ。静観するもよし。これを機にエルナトを攻めるもよし」

「戦は好かぬ」

ホオリは再び腕を組み、瞑目する。

「戦となれば、人が死ぬ。人間の諍いなど知ったことではないが、ポラリアも無関係とはいくまいな」  
 チェレスティアノの話では、今のエルナト王国にポラリアに攻め入る余裕があるとは思えない。

当面は国内貴族や、教会やそれに味方する外戚への対応に追われることになる。だがエルナトが教会に屈すればどうなる。仮に戦い抜き、国を守り切ったとして、ヴィクトリアが亜人種を弾圧するような、エドワードとは真逆の王であつたならどうなる。とはいえ——

「だが、我らには関わりのないことよ。それでポラリアが滅ぶというのであれば、お前さま方の言うように『まじりもの』はこの世にあるべきではないということであろう」

まじりもの。それこそが、アルティス聖教会が亜人種を弾圧する根拠だ。亜人種は古代文明隆盛の折、奴隷階級の人間と他の種——例えば獣人族であれば嗅覚の鋭いイヌ科を中心とした哺乳類、エルフ族なら光合成によって栄養素を自給可能な植物と——と掛け合わせて人工的に作られた、いわば合成生物だ。作られた種に対する生理的な嫌悪もあるだろうが、アルティスは境界線の守護者——あるべき境界線を踏み越えて創られた種は、審判者のために逆らう存在である……それが現在、アルティス聖教会の主張する内容であり、審判者を奉ずる人々の一般的な認識である。

「人の子の行いもまた、自然の営みの一部よ。強き者が生き残り、弱き者は死に絶える。我らはそれに従うのみよ。のう、枢機卿殿よ。我ら獣人族の鼻は特別よく利くのでな。お前さまがどうやって人の子をたぶらかしてきたのかは知らぬが、まっとうな手段ではあるまい」

ホオリは不愉快そうに鼻にしわを寄せた。獣人族の鋭い嗅覚が、二対ある聡い耳が、何よりホオリが積み重ねてきた勘が、目の前の男が背負う業を見抜いている。

「——何もかもがお前さまの手の内で動くなどと、ゆめゆめ思わぬことだ」

それだけ言うと、ホオリはむつり口を閉じてしまった。チェレスティアノは肩を竦め、テントの中を気まずい沈黙が満ちた。

「おいおい親父殿。それで終わるかよ!」

沈黙に耐えかねたカガリが父親に抗議した。ジロリと睨みつけられて一瞬たじろぐが、それでも

どうにか言葉を続ける。

「そのヴィクトリアって女の人となりによっちゃあ、ポラリアが滅ぶってことだろ！ 黙って見てろって言うのかよ！」

「ならば問おう。我が息子よ」

ホオリはまっすぐに我が子の顔を見て問いかける。

「人間の世の営みは人間のもの、我ら獣人族に何ができるというのだ」

「それは」

カガリはぐつと言葉に詰まった。それでも生来の負けん気からか、勢い任せに言い返す。

「そうだ！ そのヴィクトリアって女に直接会いに行つて、人となりを俺が見極めてやる！ 俺らの敵になるような相手なら、ズドン、だ！ 眉間に一発ぶち込んでやらア！」

まるで考えなしの返答だった。ホオリは思わず長く、深いため息をつく。

「なんだよ、そのため息は！」

「相手は人間の王ぞ。そう簡単に近づけると思つてか。返り討ちに会うのが関の山よ」

「う……」

「毎度毎度、お前は考えが足りぬのだ、バカ息子が」

ぴしやりと言い切られ、カガリの耳と尾はすっかり萎れてしまった。ここで親子のやり取りを見守っていたチェレスティアノが口を挟む。

「——ホオリ卿は静観されるおつもりなのですが、他の長はどうでしょうか」

「……む」

「あなた方は各氏族の長による合議によって国を動かしておられる。静観をするにしても、あなたお一人でその決断を下せるわけではないでしょう」

チェレスティアノの言葉にホオリはふむ、と鼻を鳴らす。

「そうだけ親父殿！ 長たちが決断を下すにも情報が必要だろ？ だから俺がエルナトに行つて情報を集めてきてやる！ これなら文句ないだろう！」

カガリの言葉には答えず、ホオリはチェレスティアノの目をじつと見据える。明らかに常人ではないこの男は、一体何を企んでいるのか――

「幸か不幸か、エルナトは今混乱の最中にある。獣人族の一人や二人紛れ込んだところで、誰も気には留めぬでしょう。無論、私からも手は回させていただきますゆえ、少なくとも教会の手の者がご子息に危害を加えることはない。これだけは約束いたしますよ」

チェレスティアノは、安心させるような笑みを浮かべて受け合つた。その言葉にホオリは顎に手をやって考え込む。

「むう……お前さまの企みに乗せられるのは業腹ではあるが……我が息子は跡取りとしてあまりに未熟。ボリアアの行く末はさて置き、この機に見聞を広めさせるのも悪くはないか」

「おい親父殿、まるで俺がバカ息子みたいな言いようじゃねエか」

「過不足なくたわけ者であろうが」

容赦ない言葉にカガリの耳と尾がまたへたりとなるが、ホオリは気にせず続ける。

「カガリ、エルナトへ向かうことを許そう。くれぐれも先走つてアルティスの子らと諍いを起こすでないぞ」

「いいのか？」

カガリの耳と尾がピンと跳ねる。我が子のわかりやすさに、ホオリは思わず苦笑する。

「構わぬ。これもまた、修行の内よ」

「マジか！ おっしゃあ！ 『毛なし』の街つてのも一度見てみたかったんだよなあ、俺ア」

「……」

本音を零したカガリを、厳しい父がジロリと睨みつける。カガリの耳と尾がまたへたつた。

「――さつさと旅の支度をしてこい、このたわけ！」

ついに落ちた父の雷に、カガリは文字通り尻尾を巻いて逃げ出した。チェレスティアノはその様子を愉快そうに見送ると、再びホオリの方に向き直つた。

「……元気のいいご子息でいらつしやる」

「何をしかしたものだか、親としては気が気ではないな」

だからこそ、とホオリは続ける。

「お前さまの思う通りには動くまいよ」

ドアから風が吹き込み、屋内を照らしていた火が揺れる。チェレスティアノがどんな顔でホオリの言葉を聞いたのか。二人の他に知る者はいない。



## 第一章 迷える森

エルナト王国は、周辺諸国と比べれば亜人種<sup>デミヒューマン</sup>に寛容なお国柄<sup>くにがら</sup>である。まったく差別が存在しないわけでもないが、先だって崩御した国王エドワードの統治下においては、少なくとも国内で目立<sup>デミヒューマン</sup>た亜人種とのトラブルはなかったのだ。

さて、一応は当代の王であるヴィクトリア・ラバ・アーマントウルドはどうかというところ、エルフの里で起きた問題の解決に自ら乗り出す程度には、亜人種<sup>デミヒューマン</sup>に対して好意的であった。

——もちろん、彼女自身の好き嫌い以外に、政治的な意図がないわけではない。まだ年若いヴィクトリアの不足を補っているのが二人の兄、アルバートとスタンリーなのだが、特に知略に長けたスタンリーがエルフ族に恩を売<sup>かちやう</sup>ることを強く勧めたのだ。

エルナト王国は混乱の渦中<sup>かちやう</sup>にある。数年前の《七大悪魔》<sup>デモグロス・デモラ</sup>レヴィアタンの出現を皮切りに、先日起きた王都でのレヴィアタン、ベルゼブブの出現。司教クレメンスが<sup>おこな</sup>行っていた人身売買と汚職で、多くの人々にとつての拠り所<sup>よ</sup>であった教会への不信が高まり、宰相イザドルが起こした反乱により、危うい均衡状態を保っていた貴族たちの力関係もズタズタ。いつどこがはじけ飛んでもおかしくない政治状況にある。

ヴィクトリアが王の器ではないと判断されれば、貴族たちは途端に反旗を翻すだろう。とはいえ明確に二心を持っていた貴族たちは、スタンリーの謀略により概ね肅清済みであり、動くに動けないのが現状であるわけだ。

そこへ来て、交易のために王都を訪れていたエルフ族が、王家に助けを求めてきたのだ。エルフ族はアルティス信徒が持ち得め様々な呪術や史学、薬学の知識を持っている。これまでは細々とした交易という形でしかその恩恵を得ることができなかったところを、規模を大きくできたならどうなるだろうか？

現在のアルレシャ大陸の医療は、アルティス聖教会——《使徒》<sup>アシユル</sup>の加護がもたらす法術によって賄われている。法術自体は《神聖語》<sup>ヘスチユア</sup>を丸暗記すれば発動可能だが、高等な法術の多くは、審判者に尽くすことを誓った聖職者や神官、聖騎士、多くの寄進を行なった大商人や貴族にしか公開されない。病気の治癒などはその典型だ。

エルフ族の知恵を拝借できれば、法術に依存するところが軽減される、つまり教会の影響力が弱まるのだ。

アルレシャ大陸において、女性の地位は決して高くない。ヴィクトリアが王座にいる限り、教会から有形無形の圧力がかかるだろう。それを防ぐ意味で、エルフ族と友好的な関係を築くことは必要なことだった。

もっとも、ヴィクトリア自身はそこまで難しいことを考えていない。ただ善意から手を差し伸べようとしているだけだ。為政者<sup>いせいしや</sup>としては多少問題があるが、それがヴィクトリアの美点でもある。

だからこそ、利害関係ではなくその善意に付き合つてやろうという者も現れる。

今回ヴィクトリアに付き従ったのは、乳母兄であり、スタンリーの侍従であるファル、弓兵隊長ウィリアム率いる弓兵たち、アルティス聖教会の司祭メリッサと聖騎士アンリエッタ、そして——生と死を挟んだ隣り合わせの世界から招かれた《迷い子》<sup>ストレンジ</sup>である藤重爽悟<sup>ふじやまのすが</sup>。

彼は住まいであり護るべき社<sup>まも</sup>でもある藤山春日神社とともに、この世界に忽然と姿を現した。

《迷い子》<sup>ストレンジ</sup>は、存在を確認された先からアルティス聖教会の手で『保護』されてきたため、これまで存在は公にされず、あくまで噂の域を出なかった。しかし異界の建物ごと現れた爽悟をどうこうすることは教会にもできなかった。レヴィアタンやベルゼブブを調伏したのも爽悟だし、イザドルの反乱を鎮めるのに中心的な役割を果たしたのも彼だ。本人がどう思っているかはともかく、審判者に帰依しない——一応、本人は様式が違っただけで同じ存在を奉<sup>たてまつ</sup>っていると主張してはいるが——爽悟が活躍すればするほど、教会の威光は弱まっていくばかり。

いずれにせよ、ヴィクトリアたちからすれば歓迎すべき事態ではある。

さて、エルフの里はエルナト王国の中央付近に陣取っている。このため一行は馬上の人となっていた。古来、エルナト王国は森林地帯が占める割合が多かった。その大半は人の手により切り拓かれていったが、貴重な資源として残されている場所もあれば、エルフの里のように人間の手ではどうしようもない場所もある。

「——強い術の気配を感じます。これは《花》属性の《迷いの森》<sup>メイズ・ウッズ</sup>とよく似た術ですが……実物を

見るのは初めてです。これだけの規模の術式を、何百年にもわたって維持してきたなんて、エルフ族の呪術がこれほどとは」

眼鏡の位置を確かめながらそう言ったのは、教会の若き女司祭、メリッサだ。彼女の分厚い眼鏡は弱い視力を補うものでもあるが、同時に魔法の力の込められた術具でもある。その力で魔法の強さを解析したのだろう。

法術は、審判者の洗礼を受けた者なら誰でも扱える手軽な魔法だが、それゆえに規模の大きなものは発動が困難になる。多くの人間が儀式を行って、よくて数日効果があるかどうかと言ったところだ。メリッサの口にした《迷いの森》もそうした術の一つで、過去に一度行使された記録があるのみだ。森林を迷路にする魔法など、そうそう使う機会のあるものではない。ともかくアルティス信徒が苦勞してようやく発動できるような術を、エルフ族はエルナト王国が成立するずっと前から維持し続けている——ということになる。教会の聖職者からすれば脅威だろう。

ちなみに《花》属性とは、土や動植物の力を操る法術の分類である。

アルティス信徒は基本的に、一人につき一柱、《使徒》の加護を受けている。その《使徒》は八柱存在する《大使徒》の配下に属しており、《使徒》は自らの従う《大使徒》に対応する力を信徒に貸し与えてくれる——逆に言えば、それ以外の力を貸してくれないのだ。どの力が授けられるかは本人の生まれ持った気質にもよるとされているが、実際のところはよくわからない。

例えばヴィクトリアとファルは同じ《花》属性だが、片や勝気で自由奔放、片やおっとりして生真面目。性格はまるで真逆だ。

「俄然、わくわくしてくるわね。ララ・カルルは明るくて愉快な人だけれど、そんな大きな術を使つてまで引きこもるなんて、他のエルフ族はどこまで偏屈なのかしら！ アルバートお兄様とスタンリーお兄様を足して二をかけた感じかしらね？」

「リア様、そんなことでわくわくしないで大丈夫ですし、流れるように兄君の悪口を言うのもやめていただきたいですし、偏屈呼ばわりはララ・カルル殿に失礼でしょう。彼女はリア様の家臣ではないんですよ。いえ、家臣であつてもやめていただきたいんですが」

お転婆王女だったヴィクトリアは馬術に長けていて、長時間の乗馬も苦にならないらしい。

彼女とファルのやり取りはいつもこんな調子だった。ファルの本来の主であるスタンリーにして、方向性は違つて奔放な氣質の持ち主だ。彼はいつだって気苦勞が絶えない。

主君に代わつて非礼を詫言つて、ララ・カルルと呼ばれた女性のエルフ族は、ニツと笑つた。

「気にせんでええよ。偏屈な連中が多いんは事実じゃけん」

若くて美しい容貌とは似合わぬ独特の言葉遣いは、エルフ族によく見られる訛りだった。エルフ族は、古代文明期に奴隸と植物を掛け合せて創られた亜人種だ。体の半分は植物であり、髪には葉が茂っている。その姿は民話に描かれる森の精霊ドライアドを思わせる——ヴィクトリアがエルフ族に好意的なのも、そんな神秘的な容姿ゆえかもしれない。

「……そうやって引きこもつてから、こねえなことになったんじゃない？」

「ララ・カルルさんは交易のために外に出ているんでしょう。みんながみんな引きこもつてるとは言えないんじゃないですか」

口を挟んだのは黒髪の少年、爽悟だった。

「そうじゃね。退屈じゃけん」

爽悟の疑問に、ララ・カルルは肩を竦めて答える。別に外貨が必要なわけではなく、森での変化のない暮らしに飽き飽きしているから外に出ているだけなのだ。エルフ族は光合成で、水さえあれば生きていける。衣食住も森の恵みだけで十分に補ってこられた。外の世界との交流は、彼らにとって娯楽でしかないのだ。

「じゃけど、そうゆうんは若者だけでね。まあ、そもそもここ百年くらいは子供も生まれてねえんじゃけん」

「百年とはまた——大丈夫なのか、それは」

アンリエッタが目丸くする。アルレシャ大陸において、人間の平均寿命はせいぜい六十かそこらだ。百年も子供が生まれていないなら、普通は滅亡してしまふ。

「エルフ族は長命なんです。わたくしたちとは、基本的に生きている時間が違うんですよ、アンリエッタ。……事実かどうかはわかりませんが、エルフ族の長老ともなれば、古代文明の滅亡を見届けた生き証人であるとさえ言われています」

メリッサがそのように解説する。人間の寿命が十年単位なら、エルフの寿命は百年、千年単位だ。自らを若者と称するララ・カルルでも、年齢は数百年を優に超えるのだろう。

「よう勉強しとるんじゃのお。教会の司祭にしては珍しいわ」

「それは。……無知と無理解はもつとも恐るべき罪に繋がりますから。争うにせよ手を取り合うに

せよ、わたくしたちは」

「ヴィクトリア様！」

何やら議論が始まりそうになったところを、先行し馬を走らせていたウィリアムの声が遮る。

「村が見えてきました。人里にはこれと言った異変は見受けられません。このまま参りましょう」

「わかったわ。みんな、行きましょう」

ヴィクトリアが手綱を引いて馬を進ませる。ファルやアンリエッタも慣れた様子だし、メリッサは軽装のファルの後ろに相乗りする形ではあるものの、馬での移動自体には慣れているらしく平然とした様子だ。異世界人の爽悟はというと、馬を操る分には特に問題はなかったが、さすがに長時間の乗馬はこたえたらしい。常人離れた持久力を持つ彼にしては珍しく、顔に疲れが見えていた。

「——ソーゴ殿にも苦手なことはあるのだな」

「あちら側では馬なんてそうそう乗るものじゃないですからね。まともに馬を扱えるだけ褒めてもらいたいぐらいです」

アンリエッタのからかうような口調に、爽悟は少しばかり不服そうな声で答えた。

「君はなんでもできると思っていたから、少しばかりほっとしている」

「よくわからんことを言い出しますね」

「いや、バカにしたわけじゃあないんだ。ただわたしは……」

「二人とも！ 置いていかれますよ！」

爽悟とアンリエッタのやり取りを、ファルの声が遮る。せっかちなヴィクトリアがさっさと先を

行っていた。二人は顔を見合わせると、手綱を操って後を追う。

エルフの森と接しているという名もなき村まではすぐだった。なんということはない、どこにもある農村だった。

「事前の情報によると、この村の人々はエルフ族と交渉して、森の一部で林業を営んでいるんだそうです。まあ、それも細々としたものようですが。エルフ族の呪術によって賊や魔物の類が排除されるらしいので、ぜいたくをしなければそれで十分なのでしょう」

というのがウィリアムの説明だ。

「よく教会が黙っていましたね、それ」

教会の聖職者がいる前で平然と疑問を口にしたのは爽悟だ。ただ、当然の疑問ではある。教会の価値観では、エルフ族もまた忌むべき存在だ。

「この村にはそもそも、聖職者が常駐していないんですよ。一応聖堂はありますが粗末なもので、必要なときには他の村から招くんです」

田舎では珍しくもないことです、とウィリアムが補足する。

「嘆かわしいことですが、聖職者にとつてこうした地域に派遣されることは左遷と同じ。司祭もあまり熱心ではないでしょうね」

メリッサが村の様子を観察しながら言う。木造の聖堂は、お世辞にも立派とは言えないし、手入れも行き届いているとは言いがたかった。

「ま、この期に及んではむしろ幸いでしょう？ 熱心な司祭がやって来て森に火でも放たれたら、

たまったもんじゃないわ」

「リ、リア様、お言葉が過ぎますよ！ 改革派とはいえ、司祭様の前なんですから」  
ファルがヴィクトリアの発言を窘める。

「――。まあ、過激な聖職者ならそれくらいのこととするかもしれませんが。教皇庁もそうならないうちに人選には気を使っているはずですよ。ご安心ください」

メリッサがへらり、と笑って答える。彼女が特に気にした様子もなさそうで、ファルがほっと胸を撫でおろす。教会の保守派から睨まれているこの状況で、改革派まで敵に回したくはない。

「……。なあ、メリッサ、君は……」

「アンリエッタ、この村には司祭があまり訪れていないようです。お困りの方もいらっしやるでしょう。わたくしは正司祭の位を賜る身として、人々の言葉に耳を傾け、病や怪我に苦しむ方がいるのであれば癒しを施さねばなりません。あなたにはその手伝いを頼みたいのですが」

アンリエッタの言葉を遮って、メリッサが聖堂の方に目を向けながら言った。随分長い間、その場所が使われていないようだ。この地域を預かる司祭にそれほどやる気がないのか、エルフの里と近いこの村を嫌ったのか。いずれにせよ、司祭として見過ごすわけにはいかなかった。

「わたしは構わないが、いいのか。またソーゴ殿に任せきりにする気か」

「もし――あの、司祭様、よろしい、でしょうか」

掠れた女性の声が、アンリエッタの言葉を遮った。馬上を仰ぎ、おずおずとこちらに近づいてくる中年の女性。あまり裕福そうには見えない。

「随分お若くていらつしやいますか、あなた様は、司祭様でいらつしやいますでしょうか」

「ええ、若輩ながら、正司祭の位を賜っております」

メリッサはそう言うと、状況を察したファルの手を借りて馬から下りる。

「ああ、ああ、わざわざお手間を取らせて、なんてもったいないことでしょう！」

女性は今にも五体投地しそうな勢いで地面に膝をついた。

「楽になさってください。この地に立ち寄ったのもまた審判者のお導き。わたくしでお力になれることがあるのなら、どうぞおつしやつてくださいな」

「ああ、なんと、なんと、慈悲深き司祭様！ お聞きくださいな、皆不安に思っておりますの！ エルフの森があんなことになるなんて！ もしかして『まじりもの』と親しくした天罰なのかもしれません！ 思えば、思えばそうです、旦那に黙ってあたくしへそくりを」

女性が平伏しながら愚痴なのだから懺悔なのだからわからないことを大声でのたまいはじめた。その声を聞きつけたのか、なんだかわからない内にわらわらと村人が集まってくる。

「……あのー、私王族なんですけどー」

若干白けた声でヴィクトリアが言う。

「騒ぎになるよりはマシだと思えますけど。日が暮れる前に森に入りませんか。だいたい、教会の人間を連れてエルフ族が話を聞いてくれるとは思えませんし」

爽悟がつれないことを言う。

「そうじゃね。うちらエルフも、やつぱり教会をよお思つてはねえけえ……」

ララ・カルルはアンリエッタの顔を気まずそうに見て同調した。

「や、ちごおとるんじゃ。あんたのことを悪く思つとるわけじゃねえけど」

「いや、構わない。その是非はともかくとして、教会が亜人種を忌むべき存在だと教えているのは事実だ。私もそう教わってきた」

そう言いながら、アンリエッタは自分も馬を下りる。

「要するに、公然と人種差別をしているということですか」

「ソーゴ様、その言い方は」

「過不足なく事実じゃないですか？ ジブシャンの人たちのこともそうですが、あまりいい気はしません。第三者の俺がそう思うんですから、当事者としては教会なんて存在そのものが不快でしょう」

ファルが窘めるのも聞かず、爽悟はきっぱりと言い切る。

「返す言葉もない。とはいえ、一聖騎士の身分では、教会を代表して謝るなどとは言えんな」

「ただ、わたしも——無論メリッサも、このままでもいいとは思っていない。だからこそ、この地に來たのだ。教会にもそういった考えの人間がいると、せめてそれだけでも里の人々に伝えてもらいたい」

かしこまって頭を下げるアンリエッタに、ララ・カルルは少し困った顔で首をひねる。

「そうじゃねえ……まあ、あの偏屈どもが話を聞きやあええけどな」

ララ・カルルはさほど教会に対して悪感情を抱いているわけではなさそうだ——というより、無

関心なのかもしれないが。人間と比べれば、極端に長く生きる種族だ。彼女のように達観した者も少なくはないのだろう。

「ウイリアム殿、わたしはメリッサとともにここに残る。ヴィクトリア陛下の護衛はお任せする」  
アンリエッタにそう言われたウイリアムは、困ったように頬をかいた。

「護衛ですか。雑用部隊の我々にそんな大任が務まりますかね」

「ウイリアム弓兵隊長……」

ファルの低く唸るような声に、ウイリアムは、はは、と軽く笑った。

「冗談ですよ。もちろん、女王陛下のことは死力を尽くしてお守りします。こんな森の中じゃあ、ゴードンの歩兵隊やクインシーの騎兵隊はともに動けやしないでしょうからね。我々弓兵隊の力を見せる好機です」

肩に背負ったロング・ボウを親指で示して、ウイリアムはニツと笑った。アダレード將軍が重用しているだけあって、頼りなさそうな見かけによらず結構な猛者なのかもしれない。

「頼りにしているわよ、ウイリアム弓兵隊長」

軽々と馬から下りて、ヴィクトリアがウイリアムの背中をぼん、と叩く。

「お任せを。とはいえ使えるものはなんでも使うのが弓兵隊の流儀です。ファル殿にもソーゴ殿にもしっかり働いてもらいますよ。何しろ、森ではチビの方が有利なんでね」

馬を馬丁に預けていた爽悟とファルは、揃って不服そうな顔をした。ウイリアムもそうだが、爽悟もファルもエルナト人の平均から見ると小柄だ。特に爽悟は百七十に届かない身長をよっぽど気

にしているのか、只事ではない怒気を放っている——顔はいつもの仏頂面なのだが。  
ウイリアムはそれを気にした様子もなく、素知らぬ顔で部下に指示を出していた。

「——いやあ、王国の兵隊さんは、なんちゅうか……アレじゃね？」

「まったく頼りになる家臣だわ」

茶化すララ・カルルに肩を疎めると、行きましよう、とヴィクトリアは言った。かくして一抹の不安を残しながら、一行はエルフの里へ向かうべく、森へと歩みを進めるのであった。

\* \* \*

「皆、うちを見失わんようにな」

ララ・カルルが先頭に立つて進む。獣道すらない鬱蒼とした森を彼女は迷わずに進んでいく。爽悟が日本にいたときも、近所に雑木林の一つくらいはあったが、こんなまったく手つかずの自然に触れる機会はさすがになかった。出立にあたって用意された頑丈な旅装でなければ、地面を覆う低木の枝や雑草で足が生傷だらけになっていただろう。それでも平気な顔をしてララ・カルルについていけるのは日頃の鍛錬の賜物か。

「よく道がわかりますね」

少数精銳の弓兵隊員たちもついて行くのがやっと、という状況で雑談をかわす余裕まである「わかってるわけじゃねえよ。森の精霊たちが正しい道に誘導してくれてるだけ。まああんたたち

なら精霊も通してくれるかもしれないけど、この森で生まれたもん以外にやあきまぐ気紛れじゃけん」  
草木をかき分けて進むララ・カルルに、そういうものですか、と相槌あいづちを打つ。

「うちらがいれば精霊は通してくれるよ。うちらは森の一部だからね。それより——」

そこまで言っつて、ララ・カルルは先ほどからもくもくと歩いているヴィクトリアに視線をちらりと向ける。

「お姫様は大丈夫なん？ しんどかったら、休憩きゅうけいくらいはとるけど」

「平気よ。このくらい」

「このくらいって言うても——うちらエルフでもちいとしんどいくらいの道なんじゃけど」

ヴィクトリアの言葉に、ララ・カルルは目を瞬またたかせる。ヴィクトリアはすっかり息があがり、額には汗をかいているが——

「じゃけん、驚いたわ。女王様に自らおでましただけるなんての」

ララ・カルルは見なかったことにして話題を切り替えた。そのくらいの気遣いは、亜人種デミヒューマンであってもできる。

「王都にいたって、わたしに大したことはできないし——こうやってあちこち出向いて顔を売らないといけないの」

生い茂る低木と下草をブーツでかき分けながら、ヴィクトリアはエルフの森を訪れる意図を話す。

「あなたが望んでいるかどうかは別として、わたしたちはあなたたち亜人種デミヒューマンやジプシャンも国の一員として政治に参加して欲しいの。これはわたしたち兄妹で話し合っつて決めたことよ。今まで

のことを考えれば、女王自ら赴おもむかないと失礼でしょう」

「アルバート殿下は、辺境伯しやうきくらいの爵位しやくゐを渡すべきだとおっしゃっていましたね」

「へえ。保守派の急先鋒きゆうせんぽうつて言われてた方が思い切ったもんですね」

ファルの補足に、ウィリアムが感心してそう言った。もつとも、その言い草はまるつきり他人事だが。

他方、爽悟は一つの懸念を口にする。

「それは——どうなんでしょう。爵位しやくゐを渡すつてことは、権限を与えるということでもありますけど、裏を返せば王家に臣従させるつてことじゃないですか」

そのように言われてファルは少し考え込む。

「確かに、スタン様はあまり気乗りしないようでしたね」

ファルは、アルバートの提案にスタンリーが生返事をしていたことを思い返して言った。

「やあ、スタンリー殿下は王族を頂点とした身分制度自体に懐疑的な方でしょう。その割に随分職権ずいけん濫用らんようしてさすが」

と、ウィリアムが自分の見解を述べる。身分制度を否定しながら、それを利用するスタンリーの矛盾を指摘しても、彼自身にはなんら思うところはない様子だった。

「人間の国にも色々事情があるみたいじゃな。うちらもずっと無関心ではいられんか。にしても」  
ララ・カルルはふと足を止め周囲を見渡す。生い茂った葉に遮さかられた空を見上げ、真顔になる。

「里を出た頃と比べるとひどおなつとるなあ。前は獣道くらいあったんじゃけど」

「どういう、ことなの」

下草に足を取られそうになりつつ、ヴィクトリアが問い返す。

「うちが里を出たのって二年くらい前なんじゃけどね」

手近にあったクルミの樹皮を撫でたら・カルルは語る。

「……そもそもね。うちらエルフと他の生き物って、ちいとちごおとるんじゃ。半分が木でできてるけんね。うちらが死ぬときはね、ちいとずつ体がこう、植物みたいに固くなっていって、そのうち完全な樹になって、森の一部になるの。ほら、この木もそうじゃよ。うちのおかんじゃ」

その言葉に爽悟を除いた一同の頬がびくりと引き攣る。それを見てララ・カルルニヤリと笑った。

「冗談じゃけどね」

「趣味の悪い冗談はやめて頂戴！」

先ほどからどうしても邪魔な枝を鉦で落としていたが、それも元エルフの一部だったのかもしれない、とすっかり固まっていたヴィクトリアがキツと抗議する。ララ・カルルは若き女王の非難をカラカラと笑って受け流した。

「ま、うちらにも区別はつかねーし、どうでもええことじゃけん」

「エルフ族は寿命が長いイメージがありますが、そういう意味では不老不死なんですネ」

爽悟がそう言うと、ララ・カルルは「かもしれんね」と頷く。

「でもこねーな話しやー外の人間にやーあまりせんよ。——ほら、聖典じゃったつけ？ あんたたちがやたらめったらありがたがつてるあの与太話」

「アルティス信徒の前で思い切った言い方する姉さんですな。まー実際与太話だと思いますが」

「ウィリアム弓兵隊長、口が過ぎますよ」

「これは失礼。侍従殿は真面目ですネ。そんなんじゃその内胃に穴が開きますよ」

あの王子のお付きじゃあ身が持たんでしょう、とウィリアムが肩を竦める。

「僕の胃壁にはとつくのとうに穴が開いてますよ！ これ以上穴を広げないように言動を慎んでください！ まったく、アダレード將軍といい、ゴードン歩兵隊長といい、スタン様に近い方たちはなんだってこう……あなたはもう少しまともだと思ってたのに」

「いやあなんとというか、あのおっかない將軍がいらないと思うと、少々羽目が外れちゃいますよねえ」

「アルレシャ大陸にもゴリラっているんですか」

「いるわよ。エルナトにはいないけど、わたしの小さい頃商人がね——」

「ソーゴ様！ そこどうでもいいから食いつかないでください！ リア様も広げないでください！

収拾が付かなくなるでしょう！」

一通りツツコミを入れると、ファルは胃のあたりを押さえながら話を軌道修正する。

「確かにヒトが樹木になるという逸話は聖典にもありますが……」

「あら、そんな話あったかしら」

「ありますよ……。まったく、仮にも一国の女王が、亜人種ですら知っていることを覚えていらっしやらないというのはどうなんですか……」

「だってしょうがないでしょ。聖典ってつまんないんだもの」

「まあそうですね。子供の頃若い女の侍祭様が毎日読みあげてくれましたが、僕あ話の内容よりか、法衣の下のお尻しりが気になって気になって」

「まあ！ ウィリアム卿きやうったらおマセさんだったのね！ 男の子って本当にしょうがないわ」

「……ファルさん、聖典には一通り目を通してはいるんですけど、全て把握はさくしているわけではないので、俺にも解説していただけますか」

「……ご配慮ありがとうございます」

ファルの胃壁を氣遣った爽悟が、また逸それそうになった話を修正する。ファルは爽悟の氣遣いに謝意を述べると、ララ・カルルが引き合いに出した聖典の逸話いっわを語りはじめる。

\* \* \*

トゥレイス泉に始祖たるラーネイヤがおいでになってから月と日が三百と六十と五ほど巡った頃のことです。レサトの大河より少し西、トゥレイスの泉より南。名もなき森のほど近く、木こりが暮らしておりました。

木こりに名はありません。ただ、木こりと呼ばれておりました。このあたりに、木こりは一人しかおりませんでしたので、他に名が必要なかったのです。

木こりには妻がおりました。木こりの妻にも名はありませんでした。このあたりに、木こりの妻は一人しかおりませんでしたので、他に名が必要なかったのです。

夫婦の誓いを果たしたばかりの頃、木こりの妻はたいへんよく働きました。森で汗水流して働く夫のために、毎日掃除そうじをし、衣服を清め、食事を用意しておりました。木こりは、木こりの妻にたいへん感謝し、深く愛しておりました。木こりの妻も、木こりを深く愛しておりました。

愛し合う木こりと木こりの妻に、大いなる審判者からの授かりものがあつたことは、大変に喜ばしいことでありましょう。

木こりと木こりの妻は大層喜たいそうびました。木こりの妻の腹は、日と月が巡るたびに大きくなり、十月と十日を迎えると、木こりの妻は元氣な男の子を産みました。この男の子は、木こりの息子と呼ばれました。このあたりに木こりの息子は一人しかおりませんでしたので、他に名が必要なかったのです。

木こりと、木こりの妻と、木こりの息子はそれから幸せに暮らすだろうと皆が思っておりしました。しかし、審判者からの偉大なる恩寵おんちゆうを、誰もが善よき方向に活いかせるわけではありません。

木こりの息子を産み落としてからというもの、木こりの妻はすっかり人が変わったようになってしまいました。病に侵おそわれているわけではないのに、掃除そうじもせず、衣服も清めず、食事を用意せず、毎日毎日、寝て過ごすようになったのです。

木こりは木こりの妻を責めました。

「わたしが汗水流して働いているというのに、なぜお前は、そのように寝てばかりいるのか。大いなる審判者に、恥おこずべき行いとは思わないのか」

木こりの言葉に、木こりの妻は何も答えませんでした。

木こりは呆れ、怒りました。それ以来、木こりと、木こりの妻は、言葉を交わさなくなりました。木こりの妻は、昼も、夜も、何年も動くことなく、ずっと眠り続けました。木こりの息子が歩くようになり、言葉を話すようになって、それは変わりました。

木こりは何も言いませんでしたし、木こりの息子も何も言いませんでした。木こりの息子には他に母親がいまいませんでしたし、他の母親を見たこともないからです。いつしか木こりも、木こりの息子も、木こりの妻のことをまるで気に留めなくなりました。

それから三千と六百と五十、日と月が巡り、木こりの息子は成長し、木こりの仕事を手伝うようになりましたが、それでも木こりの妻は毎日眠っておりました。

ある日のことです。随分と成長した木こりの息子は、そろそろ寢床の掃除が必要だろうと、少しも動かない木こりの妻を動かそうとしました。しかし木こりの妻はびくともしません。

これはおかしいと様子をうかがうと、木こりの妻の背中から樹のような根が生えて、すっかり寢床に張りついておりました。

これは仕方ないと、木こりの息子は木こりの妻を動かすのを諦めました。

それから三千と六百と五十、月と日が巡りました。木こりの息子はすっかり大人になりました。

木こりの妻の体から、緑の芽が生えたのはちょうどその頃です。不思議に思い、木こりの息子は父親にこのように問います。

「父よ、母の体から木の芽が生えています。女というものは、このようにして木の芽の生えるもののですか」

「いや。初めて聞く話だ。何かの病なのではないか。しかし、このような病は聞いたことがない。そもそも、お前の母親はお前を産んでからというもの、ずっと眠ってばかりで少しも働いていない。お前は知らぬだろうが、お前が産まれる前は、毎日掃除をし、衣服を清め、食事を用意する働き者であったのだ。あるいはこれは、審判者から子を授かったにもかかわらず、怠惰な生活を送っていた妻に対する天罰なのかもしれぬ」

そう話している間に、木こりの妻から生えた芽は、どんどんと成長し、大きな樹になりました。

「これはいけない。父よ、このままではわたしたちも樹の中に吞み込まれてしまいます」

と、木こりの息子は、木こりを促して家を出ようとしています。

「そうはいかない。怠け者であっても、わたしの妻で、お前の母親であることに変わりはないのだ。妻の怠惰を見過ごしてきたのは、夫のわたしに他ならぬ。ならばわたしもともに罰を受けよう。我が息子よ、せめてお前だけでも無事であるよう、審判者の許しを乞おう」

話し終えた木こりは平伏し、大いなる審判者に祈りました。

そのときです。遙か天より、木こりに語りかける声がありました。審判者の御使いたるその声は、このようにおっしゃいました。

「愛しい子よ。木を伐るのがあなたの生まれ持った天分です。己の怠惰を省みるのなら、自らの務めを果たしなさい。さすれば、あなたの斧に、大いなる審判者の祝福は与えられましょう」

これを聞いて木こりは意を決すると、大きく伸び続ける木の幹めがけて、斧の刃を叩きつけました。一度だけでは、木は倒れません。

「父よ、わたしも手伝います」

親子は二人で、伸び続ける木の幹を、斧で叩きました。二人の行いは、三百と六十と五、月と日が巡るまで続きました。

三百と六十と六つ目の日が顔を出したとき、ようやく木は倒れ、それ以上広がることはなくなりました。今、エルナトと呼ばれる地に広がる森は、このとき生まれたものだと言えられています。

\* \* \*

「ねえ、この手の話を聞くとびに思うんだけど、結局どうなったのよ。木こりの妻は元に戻ったの？」

「それは僕も知りませんけど……原典はこんな感じですよ。《七大悪魔》の内《怠惰》を司るベルフェゴールと《大使徒》との戦いとして拡大解釈される場合もありますが、それはあくまで偽典であり、後世の創作というのが教会が現在表明している見解です。……ただ、現実に広まっているのは『木こりの妻はベルフェゴールに取り憑かれて木になった』という話の方ですから、エルフ族が迫害を恐れて『エルフは歳をとると木になる』ことを隠しても不思議はないと思います」

ヴィクトリアの疑問に答えてから、ファルはするように補足する。

「先ほどのララ・カルルさんの話とまったく関係がないとは思えませんね」

爽悟の言葉に、ララ・カルルが頷く。

「そうじゃね。エルナト地方の森は、古代文明を滅ぼした大水害のあと、こちらが植林したんが元

なんじゃ。じゃけん、せえって完全に間違つとも言えんけど、《悪魔》扱いされるんはさすがに困るしさ」

ララ・カルルの言葉にふむ、と爽悟は考え込む。

「森の恵みはエルフの行いの恩恵。それを認めるわけにもいかないけど、歴史を完全に捻じ曲げ隠蔽するのも憚られる、というわけですか。聖典を書いた方も苦悩したんでしょうね」

「こちらにとつては人間の歴史観なんてせえこそどうでもええ話じゃけどね。まあ、とにかく、こちらエルフはいつか木になって、森に還る。せえは別に、悲しいことでも辛いことでもねえ。当たり前のことじゃ」

爽悟にそつけなく返すと、ララ・カルルは周囲を見渡す。この大陸で古代文明が栄えていたのはそれこそ何千年も昔の話だ。その時代から生きているエルフたちからすれば、自分たちに火の粉が降りかかりさえしなければ、人間の営み——歴史の解釈など大した問題にはならないのだろう。

「じゃけど、うちが里を出るちいと前くらいからかな、そねえな風に森に還るエルフが急速に増えはじめたんじゃ」

言いながら、ララ・カルルはまた歩き出す。

「まあ、こちらも永く生きてるからね。そねえな時期もあるのかなって思つとつた。人間にだってそうゆゑ時期あるでしょ？ あんたたち定期的に殺し合ひして数減らしとるじゃねえ？」

その台詞に、爽悟がわずかに眉をひそめる。

「随分と不謹慎なことを言いますね」

「そう？ 人間が定期的にやっとなる殺し合いって、増え過ぎねーための本能じゃと思っとったよ」  
エルフと人間——それも平和な日本で生まれ育った爽悟とでは、根本的な価値観が違うのだろう。ただ、ヴィクトリアたちアルレシヤ大陸の人間もいい顔はしていない。

だが、それを責める者はいない。責めても仕方あるまい。価値観が違うどころか、生命としての在り様がまるで違うのだ。そんな存在と手を取り合うことなどできるのだろうか。一同の胸中に不安の影が差すが、エルフの方は気にした様子もない。話を戻すけど、とララ・カルルは涼しい顔で続ける。

「うちらエルフはね、森ってゆー一つの生き物じゃけん。《霊樹》を通して、つながってる——」

《霊樹》というのは、あなた方にとつての神のようなものですか？」

爽悟はララ・カルルに問う。《霊樹》。以前もララ・カルルが口にしていた言葉だ。

「あんなたちのゆー神っちゅう概念は、うちらにやあねえね。そうじゃな、親ってゆーんが、あんなたちにも理解しやすい方がいいかな」

「親、というと——エルフ族って半人半樹の種族よね？ そもそもどうやって増えるの？」

「決まってるじゃろ。《霊樹》の枝をね、こう、春さきー差し木すると生えてくるのよ。まあ歩けるようになるまで八年くらいかかるじゃろか」

ヴィクトリアの問いに、ララ・カルルはさらりと答えるが、場に微妙な沈黙が落ちる。エルフ流の冗談なのだが、本気なのだからわからない。

「柿か何かですか」

桃栗三年柿八年——爽悟はとりあえず沈黙を破るべく思いついたことを言ってみた。

「《霊樹》がなんの木かはうちも知らんけど、すくのおても柿じゃあねえね」

ララ・カルルは冗談めかしてそう答える。そんなやり取りをしている間に我に返ったヴィクトリアが、おそろおそろと言った調子で口を開く。

「差し木で増えるって……冗談よね？」

「冗談じゃねえよ」

ララ・カルルはどう説明したものか、と腕を組み、首を捻る。さほどの関心がないとはいえ、一般的な哺乳類とまるで違う増え方をしているという自覚くらいはある。だが、差し木をしてすぐにエルフが生えてくるわけでなし、この場で証明する手段などあるまい。ララ・カルルは納得させるのを放棄して話を続けることにしようだ。

「うちらが森っちゅう一つの生き物ってゆーんは、そうゆうことでもあるの。聞いたことあるよ、人間の双子って気持ちが普通より通じ合うんじやる？ せえと似たようなもんじゃねえの、知らんけん」

それを聞いたファルがふと思いついたように口を挟む。

「……《植物感応》とか、《植物操作》とか、《植物分析》とか、有効なんですか」

ララ・カルルの話が事実なら、彼女らは「植物の要素を含んだヒト」というより「動物のようにふるまう植物」だ。限りなく植物寄りの存在なのだ。であれば、植物にかける法術が彼女らに有効ということになる。

「効くんじゃねえじゃろうか。実際うちらも《枯死》の呪文を唱えられたら逃げろって言われとるし」  
「そんなマニアックな術使える人そうそういませんよ……いえ、まあ使えますけど」

ファルが困った顔でそう答える。わざわざ植物を枯れさせる場面なんて、日常生活ではあまりない。  
「何に使うのよ、そんなの」

ヴィクトリアがちよつと呆れた顔で言う。

「いえ、その……草刈りとかに便利なんですよ。根絶やしにできるんで……」

気まずそうなファルの言葉に、ララ・カルルはカラカラと笑った。

「かわいらしい顔してきよおてえことゆうねえ、あんた」

少し間をおいて、ララ・カルルの笑顔がふと消える。

「話が逆れたけどさ。そうゆうんじゃけん《霊樹》に何かあったらわかるんよ。伝わってくるんじや——『森に還れ』って意思が」

ララ・カルルの視線が足元に落ちる。そこにはシダ植物や蔦、土を飛び出して露出した何かの根がぐちゃぐちゃに絡まり合っている。

「枯れるよりよっぽど、きよおてえことじゃ。《霊樹》にそう語りかけられると、引っ張られてゆくけん。なんもかはあんざりして、嫌になつて、怒りも悲しみも喜びもねえ樹になりたいと思うしまう」

彼女の静かな声が、何よりも明確に状況の深刻さを物語っていた。

「前はそねえなことなかった。《霊樹》はうちらをただ見守ってるだけで、干渉なんてしてこなかった。

せえがこうやってうちらエルフや……森に干渉しとる」

ララ・カルルの話を黙って聞いていたウィリアムが、膝をついて足元の植物を探る。弓兵隊の任務は本来弓による支援だが、法術による遠隔攻撃が可能なアルレシャ大陸では、弓が戦力として積極的に運用されることはあまりない。いわゆる便利屋である彼らは、偵察・探索を主な任務にしている。その中にはこういった森も含まれる——なまじっか植物を魔法で操れるファルやヴィクトリアより、よっぽど森に詳しいのだ。

「——確かにこの辺の植生はおかしいですね。陽の当たらないところまで余さず草や葉が茂っています。そもそも低木や下草がここまで密集したら何かしらダメになるもんです……《霊樹》とやらの影響で、植物そのものが異常に活性化しているのかもしれない」

立ち上がると、ウィリアムは一同の顔を見回して言った。

「このまま放っておくと、森が際限なく広がって近辺を呑み込む、なんてこともあり得るかもしれませんね。一介の弓兵に過ぎない自分には、対策など検討もつきませんが」

最後にちらりと爽悟の顔を見る。お前がなんとかしろよ、と言外に言っているようだ。

「俺もこれと言った対策は思いつきませんが。そもそも《霊樹》がどうしてそんなことをしているのかわかりませんし」

「どうなの、ララ・カルル。あなた、《霊樹》の意思を感じ取れるんでしょう」

爽悟の言葉を受けて、ヴィクトリアがララ・カルルに問う。しかしララ・カルルは困ったように首を横に振った。

「うちにもそこまではわからんよ。森に還りゃーわかるのかもしれないけど、そうになったらもう口も利けなくなるし、まだ木になんてなりとうねえ」

「八方塞がりね」

ヴィクトリアはため息をついた。異常が起きていることはわかった。だが原因も解決策も見えてこない。勢い込んでやって来たはいいものの、エルフが減んでは交渉もへったくれもないだろう。

「——かと言って放つてもおけないわ。行きましょう」

ヴィクトリアは己を叱咤し、皆を促した。ララ・カルルを先頭に、一行は深い森を再び歩きはじめる。

\* \* \*

雷矢がこの場にいたら喜びそうだな、というのが爽悟の感想だった。

ララ・カルルの先導で辿りついたエルフの里は「いかにも」というか「これぞ」と言った場所だった。巨大な樹木がいくつかそびえ立ち、そんな樹木のウロに扉が取りつけられている。これがエルフ族の住居なのだろう。大樹は里全体に影を作り、その影を、散在する木の枝に灯った、ぼんやりとした輪郭のない光の花が柔らかに照らしている。

印象派の絵画をそのまま現実に変写すればこのような光景になるのかもしれない。爽悟はカメラ小僧ではないが、カメラを持ってくればよかったなど今ほど思ったことはない。

「きれいな場所ね」

ヴィクトリアも同じ感想を抱いたらしい。ぽつりとそう呟いた。

「これで尖った視線が刺さってこなけりゃ、観光地として最高なんですけどねえ」

ウィリアムがため息をついた。爽悟も確かに敵意というか、強い警戒のこもった視線を感じる。ここを人間が訪れることなど滅多にないのだろう。敵意でなくとも、心地のいいものではない。

「まあ、しゃーねーね。なんせー、今更ここに残つとるような連中は保守的じゃけん」

ララ・カルルが少しうんざりしたような様子で言った。彼女にとっても居心地のいい場所ではないのか、早く用件を終わらせたいとばかりに、里の奥へ向かって歩きはじめた。

「ウィリアムはここで待機よ。攻撃してくる様子はないのよね？」

「はい。そこは問題ないでしょう。エルフは荒事を好まない種族ですし、ララ・カルル殿の話を聞く限りでは、我々と小競り合いなんぞしていられる状況ではなさそうです」

ウィリアムの言葉に、爽悟も同意するように頷く。こちらが攻撃をしなければ、エルフたちから手を出してくることはないだろう。そもそも爽悟たちを連れてきたのは、同族であるララ・カルルだ。もつとも彼女の様子を見るに、あまり里のエルフたちとうまくいっているようにも見えないが。「わかった——あまり刺激はしたくないわね。ウィリアムたち弓兵隊はここで待機。ファルとソーゴで、一応わたしの警護をして頂戴」

「はっ」

ウィリアムは左胸に拳を当て敬礼する。

「みんな、サボタージュの許可が出たぞ」

「……ウイリアム卿、將軍に言いつけますよ」

「待機だからといって気を抜くな。獣や魔物が紛れ込んでくる可能性もある。エルフの領域だから荒らすのは憚られるが、追い払うくらいは問題ないだろう」

どうもアダレード將軍がこの男の泣き所のようなだ。ファルが將軍の名前を出した途端キリッとなった。実際問題、雑用部隊と貶されているウイリアムたち弓兵隊を重用しているところから、ウイリアムは將軍に足を向けて眠れない立場なのだろう。それくらいは政治に疎い爽悟にも察しは付く。「いいわよ。戦争してるわけじゃないし、兵隊なんて手を抜いてるくらいでちょうどいいの。易々と命なんて懸けられるのは本意じゃないわ」

行きましよう、ヴィクトリアは爽悟とファルに声をかけ、ララ・カルルの後を追う。

ララ・カルルは、一際大きな樹の前で一行を待っていた。

「ララ・カルルさん、ここがエルフ族の長のお住まいですか」

ファルが問いかけると、ララ・カルルが不機嫌そうにふてくされた顔で頷いた。

「……あまり仲がいいってわけじゃなさそうね」

「反抗期というやつでは？」

「何百年何千年と生きているエルフに反抗期もへったくれもあるんでしょうか？」

「ああ見えて思春期なのかもしれないよ。花粉とかが出るか出ないかの時期かもしれない」

「ちよつと何言ってるかわかんないわね」

「僕もわかりません」

「わからせるつもりもないですが」

「じゃあなんで言ったのよ！」

「それよりララ・カルルさんはなんで長と不仲なんでしょうか」

「本人に聞けばいいじゃない」

「それはさすがに不躰過ぎやしませんか？」

「このやり取りがすでに不躰な気が……」

「こんなとき、雷矢がいれば……」

「弟さん、人見知りするでしょう……」

「いえ、子供特有の無邪気さで、失礼なこと言ってもなんとなく許される気がしませんか」

「あなた弟が大事なのかそうでもないのかどっちなのよ」

「どちらかと言うと、立ってるものは親でも使うタイプなだけです」

「選択肢の中ない回答ですね、それ……」

「全部聞こえとるよ」

『ですよー』

「ちーとは悪びれたらどうなん……」

なんだかんと言つて三人ともまだ十代なのだ。十代の子供が集まってこの程度ならマシな部類だろう。ララ・カルルもそれについては特段気を悪くした様子もなさそうだった。

「うちは里を捨てたようなもんじゃからね。うまくいつてるはずがねーっしょ？」

「故郷を出ただけでは、捨てたことにはならないと思いますけど」

ララ・カルルの言葉に疑問を覚えた爽悟が首を傾げる。爽悟が生まれ育った地方都市では、地元を離れ、都心部に働きに出る者も決して珍しくなかった。むしろ、地元に残る方が少数派だったのだ。だが自立しようと、実家は実家、地元は地元だ。その場所を捨てるわけではない。それが爽悟の価値観である。

「ゆーたじやる。うちらエルフは、森っちゅう一つの生き物なんじゃ。森から離れるってゆーんは、せえだけ、でえれえことなんよ」

体の一部を切り離すようなものなのだろう。爽悟の世界でも民族や文化、宗教による価値観の違いはある。それでも同じ『人間』だった。しかしエルフは、根本的に『違う生物』なのだ。

そのことは爽悟よりもヴィクトリアたちアルレシャ大陸の人々の方がよく承知しているだろう。それでもともに歩もうというヴィクトリアたちの決断がどれほど重大なものであったか、今になって爽悟は理解する。

「おいジジイ！ 帰ったぞ！ 客もいる！」

ララ・カルルは扉を乱暴に叩いて怒鳴る。もうほとんどヤケクソのようだった。

「――入れ」

抑揚のない声が扉の向こうから聞こえる。ララ・カルルはこちらにちらりと視線を寄越すと、扉を開けた。

扉の先には、ジジイというにはまだ若い男性が座っていた。エルフ族の寿命は長い。外見だけで

年齢を推しはかることは難しいだろう。ララ・カルルがジジイというからには、よっぽどのジジイであるに違いない――多分中国の歴史よりは長く生きているのではなからうか。爽悟は勝手にそう思った。

「お姫様、この愛想のねえジジイが里の長、フラ・ナッツじゃ」

ララ・カルルはすっと右に立ち位置をずらし、場所を空ける。後ろで様子を窺っていたヴィクトリアが進み出て、優雅に一礼した。

「お目にかかれて光栄です、フラ・ナッツ卿。わたしはヴィクトリア・ラバ・アーマントワールド。先だって審判者の大河を渡った父に代わり、王冠を引き継ぎました。今日はそこご挨拶に参っております」

フラ・ナッツはふと目を眈め、ヴィクトリアを観察する。それからララ・カルルを睨みつけた。「森を捨てた小娘が帰ってきたと思ったら、招かれざる客まで連れてきよったか」

「精霊が通した。彼女らは招かれざる客じゃあねえ」

ララ・カルルとフラ・ナッツがしばし睨み合う。先に視線を逸らしたのはフラ・ナッツの方だった。「精霊が通したとありゃあ、仕方あるまあ……。人間もまた円環の一部。受け入れよう。歓迎もせんが」

「……感謝いたしますわ、フラ・ナッツ卿」

爽悟は護衛として後ろで直立しているので、その顔を窺い知ることはいないが、ヴィクトリアは必死で笑顔を作っているのだろう。フラ・ナッツの態度に苛立っているのは声音からもわかる。

同じく横で立っているファルを見やると、姿勢こそ微動だにしないが、目が回遊魚以上に泳いでいる。「人間の歴史の中で女の君主がいなかったわけじゃあねえが、エルナトの堅物どもが女に継がせるたあな」

驚いている、というより、疑っている、というような調子だった。表情は爽悟と似たような仏頂面<sup>ぶつぽう</sup>で、わずかにばかりしか感情を読み取れない。

ヴィクトリアは疑われても特に動じた様子はなかった。スタンリーの入れ知恵なのだから知らないが、元々想定の内だったのだろう。

「ええ。我がエルナトは変わりつつあるのです。変革の影響は、いずれと待たず大陸全土に及ぶことになる、わたしたちは考えています。そうなれば戦乱は免れないでしょう——わたしは王族に名を連ねる者として、この国を守る責務があります。そのためにはこのエルナトの地に住まうすべての人々が、信仰や主の垣根<sup>かきね</sup>を越え、知恵と力を合わせねばなりません」

ヴィクトリアは、じつとフラ・ナッツの目を見据える。

「——あなた方にも、エルナトの政<sup>まつりごと</sup>に参画していただきたいのです。わたし自身は変革の、いわば旗印に過ぎません。さしたる知恵も、力もありません。兄弟や貴族、末端の兵卒からあまねく王国に住まう人々の力を借りてなお、この政局を無事に乗り切れることは難しいでしょう。ですが、あなた方が悠久の時を経て積み重ねてこられた叡智<sup>えいち</sup>があれば、それもなせぬことではないかもしれない」少し前までの無軌道<sup>むきどう</sup>ぶりが嘘のように、ヴィクトリアの意思は明確だった。声は力強く、言葉は迷いなく、瞳はまっすぐにエルフの長を捉えている。

フラ・ナッツはふむ、と少し考え、口を開いた。

「ならば知恵を貸そう、人間の王よ」

ヴィクトリアの強い眼差<sup>まなざ</sup>しにもひるむことなく、フラ・ナッツは静かに言った。

「——諦めることじゃ。なげえ歴史の中にあつて、血を流さんと変革をなし得た人間やらなんやらはおらん。建国王ミッシェルは賢<sup>さか</sup>しい男じゃつたが、せえでもかななかったことじゃ。お前みてーな小娘に、我々が力を貸したところで、できるわけがねえ」

「おい、ジジイ」

「……構わないわ、ララ・カルル。最初からこうなるだろうと、予想はしていたから」

あまりの言いように怒鳴<sup>どな</sup>りかえそうとしたララ・カルルを、ヴィクトリアが視線だけで制した。

「我が国への協力については、無理強<sup>むりじ</sup>いはいたしません。わたしたちアルティス信徒がこれまでにあなた方にしてきたことを思えば、虫がよすぎるというものでしょう。——フラ・ナッツ卿。この度ここを訪れた用件は、それだけではありません。この森に異変が起きていることは、あなた方エルフなら当然把握<sup>はあく</sup>しておられますわね？」

ヴィクトリアの言葉に、これまで微動だにしなかったフラ・ナッツの肩がぴくりと跳ねる。

「この森に何が起きようと、お前たち人間<sup>ヒューリン</sup>に関わりのある話ではあるまい」

「そうかしら。あなた方エルフも、近隣の村と交易をされているではありませんか。この森に何かあつては、村人の生活に影響が出るでしょう」

「——仮にこの森が、お前たちの祟<sup>あが</sup>める聖典の通り、森に吞<sup>の</sup>まれることになったとしても、それが